

研究報告①

## 「日体史料室」の紹介 —史料収集活動、大学史・部史との関わり—

日本体育大学図書館課 宮原 柔太郎

### はじめに

ただいまご紹介いただきました、日本体育大学図書館の宮原と申します。本日は、「『日体史料室』の紹介—史料収集活動、大学史・部史との関わり—」というタイトルでご報告させていただきます。

### 1. 日本体育大学と日体史料室の紹介

#### 日本体育大学の概要

はじめに日本体育大学（以下、本学）の概要についてお話させていただきます。

本学の前身は、日高藤吉郎（1857-1932）が1891年に設立した「体育会」です。本学の創設者である日高藤吉郎は、栃木県佐野町近郷の堀込郷に誕生し、幼くして父親と死別。親戚筋の養子になった後、17歳で陸軍に入隊しました。西南戦争などに従軍した経験が、後の体育会設立の契機になったとされています。日本人の体位・体力が著しく劣っていることを痛感した日高は、20代後半で除隊した後、私財を投じて体育会を設立しました。体育会は翌年の1892年に「日本体育会」と改称しています。午前中の関西学院大学・高岡先生のご講演の中に、「ドイツ体操の父」ヤーン（Friedrich Ludwig Jahn, 1778-1852）のお話がありましたけれども、ヤーンは日高が影響を受けた人物の一人です。ドイツ語に堪能だった日高は、体育会の設立にあたって、当時ドイツで普及していた体育協会をモデルにしたとされています<sup>1)</sup>。「国家建設の基礎は体育にあり」と

いう日高の考えは、本学の建学の精神である「たいくふきょうのもとい體育富強之基」に表されています。建学の精神の解釈は、時代とともに移り変わっており、現在では「真に豊かで持続可能な社会の実現には、心身ともに健康で、体育スポーツの普及・発展を積極的に推進する人材の育成が不可欠である」という解釈になっています。

1949年の新制大学・日本体育大学の設立から、長い間、体育学部のみ単科大学として、体育スポーツ界で活躍する人材を輩出してきましたが、2010年以降に学部の改組・新設が相次ぎ、現在では体育学部の他に、スポーツ文化学部、スポーツマネジメント学部、児童スポーツ教育学部、保健医療学部の5学部を、大学院に体育科学研究科（2022年4月から体育学研究科に改称）、教育学研究科、保健医療学研究科の3研究科を擁する「身体にまつわる文化と科学の総合大学」として、体育スポーツを基軸とした教育・研究を行っています。現在の学生数は7,000名強で、規模としては中規模大学になります。

## 日本体育大学の歩み

本学の歴史を振り返った時、特徴のひとつとして挙げられるのが、移転を繰り返してきたことです。本学の前身である体育会は、当初、東京市牛込区に設立されました。2年後の1893年には、東京市麴町区飯田町4丁目に日本体育会体操練習所を設置しています。この体操練習所は体育を教える専門家の養成を目的とし、学校体育の教員となる予備機関としての役割を担うものでした。この体操練習所が、本学の教育機関としてのスタートであると言えます。この時期には、国の体育教員養成機関を補う機関として、国立に準じる扱いを受け、国庫補助金を受領していました。1900年になると、体操練習所を日本体育会体操学校と改称。各種学校になるとともに、麴町区飯田町1丁目字牛が淵に移転しました。しかしながら、国庫補助金の交付が5年で打ち切られると、日本体育会の経営は悪化。その結果、東京の中心地を離れ、東京府内荏原郡大井町字浜川に移転することになりました。本学の年史では、この時代を「大井時代」と呼んでいます。

昭和に入ると、各種学校としての体操学校から専門学校に昇格し、さらには

大学を目指す機運が高まりました。校地が手狭になっていたこともあり、1937年には現在本学のキャンパスがある、世田谷区深沢の地に移転しています。1941年には、念願だった専門学校に昇格。日本体育専門学校と改称しました。一方で、戦況の悪化が、次第に本学に暗い影を落としていくことになります。特に1945年の東京大空襲で世田谷・深沢の校舎・施設に甚大な被害を受けた本学は、東京の地では復興の目途を立てることができず、1946年に茨城県土浦市の元海軍航空隊跡地への移転を余儀なくされました。5年間にわたる「土浦時代」が始まり、復興と新制大学認可への模索が行われました。

1949年には、新制大学日本体育大学の設立が認可され、新しい時代に求められる体育教員の養成が目指されました。当初は体育学部体育学科のみの単科大学としてのスタートで、初年度の入学者はわずか64名でした。その後、戦後復興が進むにつれ、世田谷・深沢キャンパスへの復帰の機運が高まり、1951年になってようやく復帰が実現しました。東京復帰により、入学志願者数は増加。経営が安定してきたことから、1960年代になると時代の変化に対応するため、健康学科などの新しい学科を体育学部内に設置しています。学科増設により、さらに学生数が増加すると、深沢キャンパスの狭隘化が問題になりました。そこで、1971年には横浜市緑区（現 青葉区）に健志台キャンパスを開設しています。横浜・健志台キャンパスには、陸上競技場、野球場などの新たな運動施設が建設され、現在でも実技科目や運動部の活動の中心になっています。1975年には大学院体育学研究科を開設し、教育研究の充実を図っています。その後、2010年代に入ると、女子短期大学部を改組し、児童スポーツ教育学部を設置しました。この児童スポーツ教育学部の設置を皮切りに、学部の新設・改組が続き、現在では5学部3研究科を擁する総合大学にまで拡大しています。

## 日体史料室の概要

次に、日体史料室の概要についてお話させていただきます。日体史料室は、横浜・健志台キャンパスの5号館2階にあります。5号館は、正門からメインストリートを進んだ左手にある建物で、アクセスのよい場所になっています。

日体史料室は大学史の編纂と密接に関わっており、1991年に刊行された『学校法人日本体育会百年史』の編纂時に収集された史料を中心に、本学の関係史料を保存管理しています。現在は担当事務を図書館課が担当しています。

日体史料室は書庫、作業室、事務室を兼ねた1部屋から成っており、広さは68m<sup>2</sup>とやや手狭な空間です(図1)。部屋の四方に書架を設置し、学内刊行物や収集した文書類を配架しています。古い卒業アルバムなど、保存状態が悪い史料については、中性紙の保存箱を作成するなどして、史料の劣化を最小限に抑える対応を行っています(図2)。現在は、日々受け入れている史料と併せて、過去に受け入れた史料の整理を進めている状況です。



図1. 日体史料室



図2. 中性紙保存箱による保存

## 日体史料室設置の経緯

先述のとおり、日体史料室の設置には大学史の編纂が大きく関わっています。1958年に、当時の学長であった栗本義彦学長が六十五年史構想を掲げました。当時、東京大学大学院に在学していた木下秀明氏が嘱託として編纂委員会に参加し、史料の収集・執筆を開始しています。当初は本学の度重なる移転や火災などによる史料の散逸で、裏付けとなる史料の収集に困難が予想されたため、小規模な冊子を予定していたようですが、木下氏が学外の図書館や資料室を調査した結果、相当量の史料の存在が確認されたため、方針を変更。『日本体育大学七十年史』として刊行が目指されました。2,000枚近い原稿からなる予定稿が完成していたと言いますが、残念ながらこの時は未刊に終わりました。

その後、1972年に八十年記念事業が計画された際、『八十年史』の刊行が事業の一環として決定します。編纂委員会が組織されると、未刊に終わった『七十年史』を補う形で編纂が進められました。ただ、この時にも学内で保存されていた文書類の散逸、史料収集の遅延が課題になっていたようです。ここで当時の図書館の様子についても少し触れさせていただきたいのですが、本学の図書館の歴史は浅く、組織として設置されたのは新制大学の認可がきっかけでした。設置当時の蔵書数は千数百冊程度だったと言います。また、司書資格を持つ専任職員が配置されたのは1970年代に入ってからでした。そのため、当時の図書館には、大学史の編纂を支えるだけの史料も人的資源も乏しく、大学史編纂に史料の面から協力することが難しかったようです。

八十年史の執筆は、引き続き木下秀明氏が担当されました。1973年には1,100ページを超える分量で、『学校法人日本体育会日本体育大学八十年史』が刊行されました。

次の大きな節目である百周年では、1982年に百年史編纂委員会規程が制定されました。年史の構成案などは早い段階で示されていたようですが、編集方針が二転三転し、編集作業は難航したようです。1990年に体育史研究室が中心となって編纂作業を進めるようになって、ようやく作業が本格化しています。この時には、図書館課の職員も2名が参加しており、史料収集や年表の作成にあ

たっています。八十年史以降、図書館課でも本学に関する史料を「日体史料」として収集しており、学外の先生方から提供していただいた本学関係史料と併せて、百年史の編纂に活用しています。急ピッチで編纂が進められた百年史は百周年事業のひとつとして、1991年に刊行されました<sup>2)</sup>。

百年史の編纂と時を同じくして、1990年には百周年記念事業委員会内で記念資料室設置の意見が提出され、翌年の1991年には百年史の編纂で収集された史料の保存・展示を行う資料室の設置が決定されました。1992年に、百周年記念事業委員会が収集した史料類が大学に移管される形で、「百年記念資料室」が開館しています。開館当時の担当部署は、資料室が設置されていた建物を管理していた教学局で、その後は史料の整理を担当していた職員の異動により、担当部署の変更が度々行われています。

設置当初は、現在の日体史料室が使用している部屋の他にも展示スペースがあったため、百年記念資料室で受け入れた史料の展示も行っていたようです(図3、図4)。

当時は百年記念資料室の建物入口に木製の立派な看板が設置されていましたが、現在は資料室の名称が変更されたことなどもあり、このような看板は設置されていません(図5)。

百年記念資料室の組織的な位置づけは不明確で、整理業務を主に担当していた職員が退職した後は、管理主体が不明確な状態になってしまいました。

2001年になると、図書館課が別途寄贈を受けた個人文庫も含めた整理・配架スペースとして、百年記念資料室の施設使用願を提出しています。その結果、2002年から図書館課が百年記念資料室を当面の間管理することになり、現在まで続いています。この時に名称が改められて、以後は「日体史料室」として管理を行っています。しかしながら、残念なことに百年記念資料室で保管されていたメダル・ユニフォーム類はこの時に図書館課に移管されませんでした。と言うのも、これらのモノ史料は本学で競技力強化や競技サポートを行う部署である、スポーツ課経由で寄贈を受けたものだったため、図書館課に移管するのではなく、引き続きスポーツ課が管理することになったためです。



図3. 百年記念資料室 展示 (写真パネル)



図4. 百年記念資料室 展示 (メダル類)



図5. 百年記念資料室 外観



2002年4月刊行の学報『NITTAIDAI』4号に、日体史料室設置に関する記事が掲載されています。その記事によれば、図書館課に移管された史料は文書史料が約8,000点、展示史料が約100点となっています。

次に日体史料室に関して大きな動きがあったのが、大学改革構想案です。2006年に当時の伊藤孝学長の下で、11項目からなる大学改革構想案が示されました。その中にあった「スポーツ図書館・博物館構想」では、従来図書館が収集してきた図書・雑誌などの学術資料に加え、スポーツに関するビデオや写真、スポーツ器具などの博物史料も収集し、学内外の研究者に広く公開することで、スポーツ領域における情報ネットワークのハブになることを目指した壮大な構想が示されていました。構想の具体化に向けて、伊藤学長から諮問を受けた図書館長が、検討プロジェクトを発足。2006年12月に報告されたプロジェクト答申では、「資料館規程」「博物館規程」「日体史料収集方針」の3案が示されていましたが、残念ながら実現には至っていません。

## 2. 収集方針とコレクション

### 収集方針

次に日体史料室の具体的な取り組み内容について説明いたします。初めに収集方針についてですが、大学に史料が移管されてから、幾度か収集方針案が検討されてきたものの、未だ明文化した収集方針は策定できておりません。現在、新たに「日体史料室資料収集・保存方針」を検討しています。検討中の案では、収集対象を本学の設置法人である、学校法人日本体育大学に関する史料と大学に関する史料としています。刊行物・文書類の紙史料だけでなく、写真・視聴覚資料・電子媒体などのモノ史料も対象に収集を行いたいと考えています。

現状では、紙史料、特に各事務局や附置機関などの刊行物が収集の中心になっているため、各課の事務職員が集まる会議などで刊行物の納本を依頼しています。モノ史料については、学長室や広報課などの部署から、業務の関係で提供を受けた記念品などが、日体史料室に寄贈されることもあります。また、



教員が退職し、研究室を整理する際、個人的に集めていた史料の寄贈があるケースもあります。

## 史料の整理

収集した史料の管理は、本学の図書館システムで行っています（図6）。過去にはエクセルでリスト管理していたこともありましたが、検索性の向上と将来の公開に向けて、数年前から図書館システムへの登録に切替えました。図6で各史料が「整理」状態になっているのは、OPAC上にデータを表示させないようにする工夫で、現状としては一般の利用者は日体史料室の史料を検索することができないようにしています。利用者から問い合わせがあった場合には、職員が業務用システムから代行検索し、史料の出納を行っています。日体史料室内は閲覧スペースが限られているため、利用者には隣接する図書館の中で史料の閲覧をお願いしています。

82	 添付図日本体育大学校地校舎等建物の図面. -- (:私製)
	書誌No. SB00516102 受入 発注
	 整理 2018/10/05 <b>貸出不可</b> 健志台 日体史料
83	 教員免許状授与の所要資格を得させるための課程認定申請書：昭和四十九年十一月 / 日本体育大学 [作成]. -- (:私製)
	書誌No. SB00516094 受入 発注
	 整理 2018/10/05 <b>貸出不可</b> 健志台 日体史料
	 整理 2018/10/10 <b>貸出不可</b> 健志台 日体史料
84	 教員免許状授与の所要資格を得させるための課程認定申請書 / 日本体育大学 [作成]. -- (:私製)
	書誌No. SB00516088 受入 発注
	 整理 2018/10/05 <b>貸出不可</b> 健志台 日体史料

図6. 図書館システムへの登録

## コレクション概要

日体史料室内の書架番号および項目名は表1のとおりです。表1の分類は大まかな整理・配架を目的にした分け方のため、図書分類のような体系だった分類ではありません。『学校法人日本体育会百年史』には、本学の歴史だけでなく、学校法人日本体育会（現 学校法人日本体育大学）及び各設置校の歴史も纏められたため、大学に移管された史料には法人関係の史料と設置校関係の史料も含まれています。ただ、全体の量から言えば、大学関係の史料がコレクションの中心になっています。大学関係の史料は、「大学構想・事務連絡協議会」「教授会議事録」のように項目ごとに配架していますが、一括して受け入れたコレクションは「大家氏寄贈資料」「佐々木氏寄贈資料」のように纏めて配架しています。体育系大学ならではの史料には、オリンピックなどの各種競技大会に関する史料、海浜実習・スキー実習などの実習に関する史料があります。卒業アルバムも継続的に収集しており、レファレンスでよく用いる史料のひとつになっています。

過去に、モノ史料（ユニフォーム、メダルなど）はスポーツ課の管理となり、図書館課に移管されなかったことから、学内刊行物・文書類がコレクションの中心で、モノ史料は一部のみになっています。

表1. 書架番号および項目名

書架番号	項目名	書架番号	項目名
A :	系列校	M :	実演会等 AV・年史紙焼き写真
B :	日本体育会・キャンパス工事・学期・規程	N :	年史
C :	大学構想・事務連絡協議会	O :	栗本学長寄贈資料
D :	教授会議事録	P :	図書館・オリンピックその他競技大会
E :	名簿・組合	Q1 :	募集要項・就職
F :	紀要・雑誌	Q2 :	入学・受講手続き（シラバス等）
G・H :	教員著書	R1・R2 :	研修会・実習
I :	広報・大学案内	S :	日体フェスティバル・実演会・卒論抄録
J1 :	大家氏寄贈資料	T・U :	卒業アルバム
J2 :	現物資料	V :	学友会部活動・海外研修・大学院
K :	佐々木氏寄贈資料	W :	同窓会・学友会
L :	佐々木氏・正木氏寄贈資料		

## 大学史関連史料

日体史料室が所蔵する史料を何点かご紹介させていただきます。図7の史料は『学校法人日本体育会日本体育大学八十年史』を編纂された木下秀明先生から寄贈された年史関係の写真アルバムです。木下先生が収集された写真が紙焼きの状態で纏められています。度重なる移転と戦災などで草創期の史料のほとんどを失ってしまった本学にとって、当時の様子を知ることができる貴重な史料です。

図8の史料は本学が創立百周年記念式典を開催した際に記録された写真のポジフィルムです。1991年10月28日に、当時の皇太子浩宮徳仁殿下のご来臨を仰



図7. 木下秀明先生寄贈『学校法人日本体育会日本体育大学八十年史』関係史料

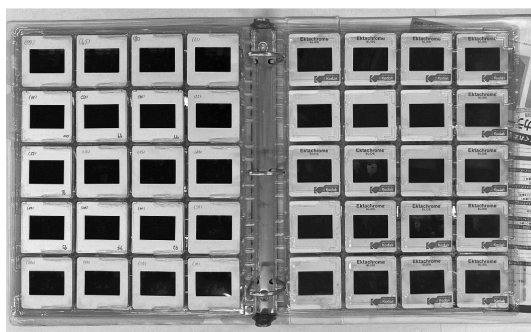


図8. 創立百周年記念式典ポジフィルム

ぎ、国内外の体育スポーツ関係者のご列席の下、本学は日本武道館で記念式典を盛大に挙行いたしました。この史料からは、百周年という記念すべき節目を迎え、体育会設立からの長い歴史を振り返るとともに、更なる発展を目指していた様子が伺えます。

## 部史関連史料

体育大学の本学にとって、学友会に所属する各運動部の活動は、本学の歴史を語る上で欠かすことができないトピックのひとつであり、教育研究活動の成果であるとも言えます。運動部によって、規模が異なり、部の歴史をまとめた部史の刊行形態・頻度は様々ですが、日体史料室では寄贈があった部史をコレクションのひとつとして保存管理しています（図9）。

各運動部が部史を編纂する際には、日体史料室に協力依頼が寄せられることもあります。各運動部の史料について所蔵調査を受けた際には、日体史料室内で所蔵している古い卒業アルバムや学友会誌、学内で刊行されているスポーツ新聞などを提供し、部史の編纂に史料面から協力しています。

一方で課題もあります。部史の作成は学生やOB・OGが主体になることが多く、頒布先も部内に限られることが多いため、刊行状況を把握しにくいことが課題としてあります。今後は各運動部の部長を務める先生方に定期的に呼び

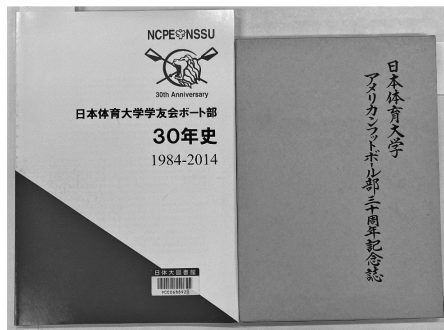


図9. 学友会所属運動部の部史



図10. 第31回オリンピック競技大会日本代表男子体操チーム記念品

かけるなどして、網羅的な収集を目指していく必要があると感じています。また、メダル、ユニフォームなどのモノ史料の収集も不十分です。基本的には、各運動部が獲得したメダル類は、それぞれの運動部が管理することになるため、日体史料室では収集することができていません。稀に記念品などを寄贈していただけることもあるのですが、主なルートとしては学長室や広報課経由になります。例えば、図10の記念品は学長室から寄贈していただいたもので、本学出身の内村航平選手、山室光史選手、白井健三選手のお名前を見ることができます。こうした記念品は、学長室内で保管されていることが多いのですが、学長が退任される際に日体史料室に寄贈されることが多々あります。現状としては、モノ史料の受入ルートを確立できているわけではありませんが、将来的にはこういった記念品や各運動部に関わるモノ史料も収集し、展示していくことが日体史料室の役割なのではないかと考えています。

### 3. 今後の課題

ここまでのまとめとして、日体史料室が抱えている課題を挙げておきたいとします。現在の課題としては、①規程類の整備、②人員・施設、③収集史料の拡大、④学内機関との連携があります。それぞれ私見も交えながら、ご説明いたします。

## 規程類の整備

まず1点目の課題が規程類の整備です。これまでも繰り返し説明してまいりましたが、本学の場合、百年記念資料室設立から現在に至るまで業務分掌や組織規程での位置づけが明確になっておらず、必要な規程類の整備ができておりません。日常的な業務のみならず、次の年史編纂に向けて、必要な史料類を収集していくためには、規程類の整備が欠かせないと考えています。特に学内文書については、各部署の保管期限を過ぎた学内文書を日体史料室に移管するための根拠規程がないため、年史を編纂する上で参考になる学内文書の散逸が懸念されています。

収集した史料の利用、提供についても課題があります。図書館に寄せられたレファレンスの回答で、日体史料室の史料を参照する機会も多いのですが、どこまで史料を公開するか、といった運用上の問題をクリアにするためには、必要な運用規則の整備も進めていく必要があると感じています。

## 人員・施設

2点目の課題は人員・施設に関する課題です。今後、各部署から文書類の移管を受けるとすれば、文書の評価選別が必要になります。どのような文書が歴史史料になりうるかといった評価選別には、図書館のスキルとは異なるスキルが求められることになるため、専門的な知識を持つ職員の配置や育成が必要になると思います。また、従来、紙史料を中心に扱ってきた図書館職員にとって、ユニフォームやメダルなどのモノ史料の扱いは不慣れなことが多く、モノ史料の整理・保存については困難を感じるケースが多くあります。これまでに収集してきた史料を整理し、後世に残していくためには、アーカイブズやモノ史料の取り扱いに関する専門的知識をもった職員の配置、育成が必要になると感じています。

施設の充実も必要です。現状としては、68 m<sup>2</sup>という限られた空間の中で、史料の保存を行っているため、今後継続的に増えていく史料のことを考えれば、さらなる保存スペースの確保が望まれます。併せて、モノ史料の保存に適

した環境（温湿度・照度など）も整えていきたいと考えています。

## 収集史料の拡大

3点目の課題には、収集史料の拡大があります。部史と関わりの中でもお話しましたが、本学の歴史を語る上で欠かすことのできない史料とも言える、学友会活動に関する史料は収集があまりできていないのが現状です。今後は大学の刊行物、文書類だけでなく、学生活動に関するモノ史料も積極的に収集していきたいと考えています。そのためには、収集するためのルートづくりや購入資金の予算計上なども進めていく必要があると感じています。

また、学内文書・報告書については、近年、学内ポータルや共有フォルダで公開・提供されることが多く、冊子体として刊行・配布されないことも増えてきました。学内ポータルで公開される場合、職位や部局単位で公開範囲が制限されることもあり、学内文書・報告書の把握が難しくなっています。公式な文書以外にも、共有フォルダ内には、学内行事で配布されるマニュアル、各種記録、写真類が電子データとして保存されています。これらの電子データの中には、将来の年史編纂で参考になる史料も含まれていますが、長期的な保存という観点で整理されている訳ではありませんし、各部署が個別に管理しているため、散逸・データの消失の危険性があります。今後、業務の電子化が進むことにより、ますます電子文書・電子ファイルは増加していくと思われるため、学内で作成・保存されている電子文書・電子ファイルの管理についても検討していく必要があると感じています。

もう1点、個人的に重要なのではないかと考えているのが、当事者たちの「語り」です。八十年史の編纂では、戦後間もない頃の本学に関する史料の散逸が酷く、史料的な裏付けが難しかったため、やむを得ず当時の様子を知る関係者の対談で補ったことが記されています<sup>3)</sup>。本学の場合、学生や教職員がオリンピック・パラリンピックなどの競技大会に選手や大会関係者として数多く参加していますが、選手たちの経験をまとめた史料はあまり存在していません。日体史料室の取り組みではありませんが、本学の附置機関であるオリ



ピックスポーツ文化研究所では、本学のオリンピックたちにインタビューを行い、オリンピックに至るまでの学生生活の思い出、大会出場で感じた想いを記録に残していく取り組みを行っています<sup>4)</sup>。こうした大学の公式な文書・記録ではないものの、大学の歴史を語る上では必要な証言をオーラル・ヒストリーのような形で記録に残していく活動を、日体史料室でも進めていければ、重要かつ面白い取り組みになるのではないかと考えています。

### 学内機関との連携

最後の課題としては、学内機関との連携があります。百年記念資料室から日体史料室に名称変更を行った際、スポーツ課が管理することになったユニフォームなどのモノ史料は、その後オリンピックスポーツ文化研究所に移管され、オリンピックスポーツ文化研究所が管理することになりました。2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催決定後、学外の美術館・博物館から展示協力依頼を受けることが多かったのですが、展示の際には図書などの紙史料の提供だけでなく、モノ史料の提供も依頼されることが多く、図書館とオリンピックスポーツ文化研究所で連携を取りながら、展示協力を行いました。連携については現在模索している段階ですが、今後はオリンピックスポーツ文化研究所だけでなく、事務局内にも点在する史料の所在を把握し、リスト化するなどして、史料の利活用を進めていきたいと考えています。

## 4. おわりに

最後にこれまでの報告を踏まえ、簡単にまとめさせていただきたいと思います。本学の史料室は百年記念資料室の設立当初から組織的な位置づけが不明確で、整理・保存スペースが限られているという制約もあり、大学史史料の収集、公開が十分に進められていないのが現状です。必要な規程類の整備など検討しなければならぬことは多いですが、できる所から一歩ずつ進めていきたいと考えています。今後も引き続き体育系大学ならではの大学史料収集について模索していきたいと考えています。

以上、本学の歴史・日体史料室の設立経緯を踏まえ、日体史料室の大学史・部史との関わりについて報告いたしました。ご清聴いただき、ありがとうございました。

#### 注・引用文献

- 1) 萩浩三「日高藤吉郎による「日本体育会」設立とドイツ体育」『日本体育大学紀要』vol. 42, no. 2, 2013, p. 67-77.
- 2) 『学校法人日本体育会百年史』は、「第一部 学校法人日本体育会の沿革」「第二部 学校法人日本体育会経営諸学校の沿革」「第三部 資料編」の3部構成で、学校法人日本体育会及び各設置校の沿革を纏めている。電子化した『学校法人日本体育会百年史』は、日体大リポジトリで公開している。
- 3) 座談会「日体を語る」では、清水正一、竹本正男、中田茂、荒川清美、見形道夫、綿井永寿、稲垣安二が学生時代の思い出話を語っている。
- 4) 日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所が刊行する学術誌『オリンピックスポーツ文化研究』で、「メダリストへの軌跡」として掲載されている。これらの掲載を纏めた『日本体育大学 オリンピックメダリストの軌跡』（学校法人日本体育大学, 2020）も刊行されている。